

旧満州で生まれ育った坂口さんは、昭和21年6月、9歳で引き揚げを経験しました。父は出征し、母は病死していたため、残されたのは幼いきょうだいだけ。引き揚げは、まさに命がけの旅だったそうです。

銃声が鳴り響き、栄養が摂れず多くの人が亡くなる毎日。やっと引き揚げ船に乗ってからも、命を落とす人は後を断ちませんでした。「火葬などできるはずもなく、遺体は海へ。その時には汽笛が3度鳴りましたが、その音はまるで死者の叫びのように聞こえました」と、切々と語ります。

どうにか引き揚げ、年月が経った平成3年。新聞に公開されたシベリア抑留死者名簿を読み、父の死を知りました。「それを見てすぐ、父の墓参りをしたいという思いに駆られ

「私たちを、戦争を知る最後の世代に。」

インタビュー Interview

佐賀県遺族会語り部
(多久市遺族会会員)

さかぐち やすこ
坂口 康子さん



ました」と、翌年のシベリア墓参団に応募。姉と2人で父の最期の地を訪れました。

現在は佐賀県遺族会の語り部として活動。「語ることは使命だと感じています。若い世代は特に、戦争のつらさ、悲しさを知っていただき、何があっても戦争への道を選ばないでほしいです」と確かな語り口で、平和の尊さを訴えています。

◆引き揚げとは？
日本の外地や占拠地、ソ連軍の占拠地（満州や樺太など）となった場所に住んでいた民間人が、日本の本土に帰還すること。

◆シベリア抑留とは？
第二次世界大戦後、ソ連軍が日本人捕虜をシベリアで強制労働させたもの。約60万人が抑留され、約5万5,000人が亡くなった。

著作紹介：「今伝えたい、平和への願い 蟻のなみだ」（編集工房edico）

シベリア墓参を終えて書きためた手記で、タイトルは蟻の行列が引き揚げ船に向かう人々と重なったことから。坂口さんが体験された数々のエピソードのほか、後半には詩歌も書き綴られた、平和への願いにあふれる1冊です。

全国の書店でご注文いただけます（ネット販売あり）

問 編集工房edico 高橋香歩さん ☎070-5419-8683



多久市遺族会は、
次世代に戦争の惨禍を繰り返さないよう
語り継ぐ団体です。

私たちは、戦争で家族を亡くした遺族が集い、世界の平和を願って活動しています。多久市では各町で慰霊祭を開催。県単位でも活動し、研修や坂口さんのような語り部による講演なども行っています。

戦没者を慰霊する活動を、次世代にも継承していきたいです。みなさんもぜひ、一緒に平和をつなぎましょう。



おた たかよし いとやま よしあき まつなが まさゆき
太田 隆義さん 糸山 喜昭さん 松永 正之さん

問 福祉課 地域福祉係 ☎0952-75-2113